

# 焼畑の民族誌紀行

## ラオスの事例

東南アジアの森林荒廃地化は焼畑農耕に一因があるとされているが、これまでつちかわれられてきた土着の知識は活用されているのだろうか。開発援助の現状を問いつつ、ラオスで焼畑の村をあるく

福井 勝義  
京都大学教授・国立民族学博物館共同研究員



手前右の斜面は、火入れ後の焼畑。左の山の岩盤が露出しているが、これは畑を「常畑化」し土壌を疲弊させ、土砂が流出してしまっただけの結果である。こうなると、植生の回復は難しい。ラオス北部のシエンクワン県、フォーンササバンの東部の「カエルの池」の集落付近

### 焼畑は、自然破壊か

近年、熱帯林の急激な減少の理由として、焼畑がマスコミなどでしばしばとりあげられている。しかし、ほんらい生態のリズムをいかした農耕であるはずの焼畑が、自然破壊の犯罪者のようにみなされていることに、かねてからわたしは疑問をもっていた。その背景には、「伝統が近代化」という錦の御旗のもとに、変容を余儀なくされていくとともに、「開発援助」という先進国の論理が介入していく口実につながっているように思っていたからである。

わたし自身の日本やエチオピアにおける焼畑調査のみならず、これまでの焼畑に関する集約的な研究は、焼畑に依存する人びとが、いかに周囲の自然をこまかく把握し、自然との共生のもとに生きてきたかを実証することであった。わたし自身なども指摘してきたように、焼畑の基本的特徴は、作物を栽培したあとの休閑にある。長期間にわたる休閑により、植生の回復する過程で、土

壌が肥沃化し、自然は再生していくのである。

しかし、フィリピン、タイ、インドネシアなどおおくの焼畑分布地域では、人口増加などによつて焼畑のもつとも重要な特徴である休閑期間が短くなり、森林が荒廃地化していくという指摘に、わたしは反論することができなかった。それは、これまでそうした現場を調査したことがなかったからである。

ただ以前の数少ない経験のひとつに、タイとくに北タイの荒廃地をみたことがある。かつての森林と思われるところは、いたるところで草地、いわゆる「ほげ山」になっていた。このほげ山を植林しようと、タイ政府はさまざまな援助のもとに造林を急ピッチですすめている。日本の国際協力事業団（通称ジヤイカ（JICA））の専門家も、こうした荒廃地の造林に協力していた。専門家に森林の荒廃の理由をたずねると、すぐさま「焼畑」という答えがかえってきた。そのことに疑問をもっていたわたしが、さらにたずねていくと、べつな答えがかえつ

てきた。それは、もともと焼畑民ではなかった低地耕作民タイが山を開拓するために、斜面の下から火を放ったことによる荒廃ではないか、ということであった。これは、焼畑の技法ではない。たしかに火を放つて、そのあとに作物をつくることには変わりはないが、山を焼きさすれば焼畑ということにはならない。

焼畑に依存している人びとは、周囲の自然を破壊しないために、じつにきめこまかい技術的対応をしている。かれらにとって周囲の自然を破壊することは、かれらの生存の基礎を失うことになることをたれよりもよく知っているからである。焼畑民が山を焼くときは、かならず斜面の上から火をいれて、下に移る。こうして火の勢いを小さくコントロールするばかりではなく、周囲の森林に延焼しないように、焼く周囲には「防火線」をめぐらしている。つまり、周囲をきれいに掃除して、火が必要以上にひろがらないように細心の注意を払うのである。日本の焼畑村では、これを「火道」とよんで



いる。このように、その年に必要な耕作面積だけを焼き、その周囲はつぎの耕作期間まで休閑、すなわち自然の再生にまかしておくのが本来の焼畑である。ところが、焼畑の技術を知らないタイの低地民たちは、開拓していくために、ただただ山に火を放つばかりなのである。これでは、山は荒廃してしまう。するとかれらは、つぎの森林に手を付け、荒廃地化の道へとすすむことになる。

タイの荒廃地化の理由がすべてこうした低地民の仕業とはいきれないが、かなりの森林面積がこうして破壊されていったことはじゅうぶん考えられる。こうしてタイの焼畑民を「森林破壊者」と非難するのは適切でないことがあきらかになった。ただ、これで焼畑が森林破壊の元凶という一般に流布されている疑いを晴らすには、事例がさがられているし、調査がまだ浅い。

## JICAへの調査協力

長いあいだ、わたしはにえきらない気持ちにとらわれていた。できれば、「焼畑が荒廃地化をまねいた」とされた

↑ 焼畑を放棄したのち、植生はススキの群落、灌木の小ヤブ、2次林というアプロセスで回復する。しかし土壌を過度に疲弊させると、ススキの群落におおわれ「はげ山」となってしまう。内蔵のためには流入した11万人もの難民が、開拓するたために、焼畑の技術を知らず山に火を放った結果である。ナムグム・ダム、ナムグム・ダムの北、24番村ちかくのナナムグム・ダム上空、あちこちの褐色の山は「はげ山」、つまりススキ



現場をわたしなりにみてみたい。そんなところへ、ある日電話がかかってきた。JICAの林業水産開発協力の計画課から、「アジア・アフリカの焼畑の基礎調査に協力してくれないか」という打診であった。わたしにとって、各地の焼畑をみてみる絶好の機会である。

JICAをふくむ日本のODA（政府開発援助）にたいしては、周知のようにこれまでNGO（非政府組織）やマスコミなどから、すいぶんきびしい批判がなされてきた。おもな批判点のひとつは、開発援助が対象国の権力とむすびつき、地域住民の立場を無視している、というものであった。この批判は、日本だけではなく、先進国の開発援助にたいしても、しばしばむけられてきたところである。さらに開発援助そのものが、援助どころか地域住民の将来を危うくしてしまうという意見もある。それは、先進国の「進化的」視点を、がらんといそれそれの地域社会に相対的であるはずの価値観や、かれらが長いあいだつちかかってきたおびただしい土着の知識を無視して、地域社会に適用しようとしてきたからである。

しかし、こうした先進国の思いあがった誤りは、近年欧米をはじめ日本のODAでもすいぶんみなおされ、地域住民を優先した開発援助のあり方が模索されはじめている。「アプロプリエイト・テクノロジー（適正技術）」、「サステイナブル・デベロップメント（持続的援助）」とか「ボトム・アップ（村おこし）」、「エンパワーメント（内在的な力が発揮するような援助）」などが、開発援助のキーワードとしてさげはれるようになった。また、日本ではまだ浸透していないが、「インディジナス・デベロップメント（土着知識にもとづく援助）」の発掘とその情報の収集の重要性が、ここ一〇年ぐらゐ前から欧米では注目されはじめている。地域住民が長いあいだ周囲の自然環境との相互作用の過程でつちかかってきたゆたかな知識を吟味し、開発援助に役立てようというものである。いまでは国際的なネットワークのもとに、その可能性が積極的

わたしが関与すること、より地域住民の立場を今後のプロジェクト立案に組みこんでもらうことができたら、という願いがあつた。わたしたちは、地球上の無数の地域社会の世界をとて把握できるものではないが、いくつかの地域社会に長く住みこんでいるうちに、村ごとからすいぶんいろいろなことを学ぶ。そのことは、個別社会をこえて他の社会をみる目をもやしなつてくれるのである。わたし自身、延べ半年以上にわたり住みこんだ社会は、タンザニア北部、四国の石鍾山麓、エチオピア西南部、スーダン南東部の四つの社会になる。今回のラオスとベトナムでの調査は、それらにくらべれば、ほんの予備観察にしかすぎない。それでも、この地域の焼畑に関して、いくらかの特徴をつかむことができるかもしれない。

わたしは、一九九四年三月二〇日から四月二〇日まで、アジア経済研究所総合研究部の研究員鈴木忠徳さんと、この調査を担当することになった。鈴木さんは、もともと林学が専門で、JICAの林業水産開発協力の補佐をつとめ、現在はアジア経済研究所に出向して、かれの立場から環境を主要テーマに研究中である。今回のふたりの目的は、いささか固い表現になるが、「荒廃農用地復旧造林基礎調査」のテーマのもとに、ラオス、ベトナムの二カ国を対象に、(一)森林破壊の原因のひとつとされる両国における焼畑農耕の事情をあきらかにする、(二)社会林業の考え方を導入した各種手法によって、焼畑農耕に依存する人びとの生活と森林の保全を両立させるJICAプロジェクトの実現可能性をさぐる、ということであった。たいへん大きな目的だが、調査期間がきわめてかぎられていることから、なしえることもおのずと限界があるが、ともかく焼畑の村をたずねてあることを最優先にした。ラオス、ベトナム両国の焼畑研究は、一九五一年に出版されたフランスの人類学者イシコウイッチの『ラメック』(参考文献欄参照)にたよるほかはない。概説的な書物だが、大事に携帯して成田をあとにした。

に模索されはじめている。また、世界銀行でも、研究プロジェクトのひとつとして、三年ほど前から土着知識の情報収集にのりだした。

じつはこうした土着知識の調査研究は、長いあいだ文化人類学の主要なテーマであつた。この分野では、だんに土着の知識や技術の記述のみならず、それを体系的に描きだし、その背景となる土着の意味の世界を浮き彫りにしていくことにすいぶん長い年月をかけてきたのである。ただし、かりにそうした土着の世界をふまえたこと

ろで、開発援助というフレームが、はたして地域住民の将来にどれほど貢献できるものなのか、樂觀することはできないが、すくなくともこれまでの土着の知識や価値観を無視した計画よりも、より地域社会を配慮したプロジェクト作成が可能になろう。

いずれにせよ、わたし自身がこうした焼畑の基礎調査にくわること、だんにわたしの研究的関心をみだすばかりではなく、日本のODAにおけるプロジェクトの立ちあげ方を見ておきたかった。さらに、微力ながらも、







ナムダム・ダム、ダムの北方の村、バン・クワレットはカム民族の住む村である。この高床式住居の2階でモチ飯を食べながら、この村についての話いろいろをきいた

一通訳をしていただいた安井清子さんが、モン民族の老婆となつて、その話をきいて、国連の援助で建てられた難民キャンプで



クサバ、タロイモ、ゴマ、バナナ、トウガラシ、インゲン、ナスである。

四月二〇日ごろ、イネの種まき。一年目にしてすでにススキと小さな灌木がはえてくる。六、七年目まで、ススキの群落は林にかわつていく、という。ススキがおおくてもすくなくとも、きりはらつて焼き耕地にする、という。テワダ(ラオ語で神)のいそうなところや遺体を埋葬するところは、残しておく。

集落の建築材を確保するため、森林保護区と焼畑地はわけていく、という将来計画を周囲の山を指さしながらおしえてくれる。

コーヒが現金収入になるというので栽培してみたが、これまでも買いにこなかった。クワもやってみたが、うまくはなかつた。現金収入は、砂金、魚、建築材の伐採など。女性は、とくに織物をして稼ぐこともなく、せいぜいトリとブタの飼育くらい、という。

### 二四番村と難民キャンプ

昼食をとりながら二時間ほど話を聞いたのち、わたしは帰路はモンの村に立ちよることになった。ススキの優先群落にはさまれて、ときおり二次林がみられる。そんな林のあるところのみ、集落が点在する。モンの家屋は、さきほどのカムこととなり、高床ではない。

いくらかまとまった集落で車をとめる。立ち話をしている人に、焼畑の話がききたいとたずねると、村長さんを紹介してくれた。ナムダム・ダムから五〇キロメートル上流にあるこの集落は、ネンゴ・プラウという。そのまま訳すと、「二四番村」ということになる。名前からして、あたらしい開拓村にちがいない。

村長さん自身、この村に住みついたのは一九八六年という。わずか八年前のことである。モン語のベテラン安井さんに通訳してもらい、少しずつきいていく。かれ自身三五歳の若さだが、すでに村長を二回経験している、という。村の構成は、モンの家が五七戸、さきほどのカムが四戸。カムの人ひとのことをモン語でアタウという。かれの父は、北のシエンクワン県にあるフォンサバンでうまれ、焼畑をいとなんでいた。よくいわれる焼畑しらずの低地民の開拓者ではない。かれ自身もシエンクワン県でうまれ、親戚をたよつてこの地にきた、という。ついで、焼畑の話をきく。

焼畑の作物は、オカボ(陸稻)、モチがおおい、トウモロコシ、ヤムイモ、パイナップル、バナナ、ピーナツ。

四月一四日、一五日程焼く。栽培は、最初の一年間のみ。一年目にも栽培したことがあるが、育ちが悪い、という。放棄後四年間おいて、五年目に再度焼く。土地があれば、もつと長く休ませておくことができるが……。ヤマ焼きは、村全部で焼く。モン語で、ヤマ焼きのことをアラーテ、焼いた直後の畑はア、種をまいたのちの畑はアブレ(稲畑)、テボツク(トウモロコシ畑)とい

う。また、休閑林はクシア、ススキ群落のことをタオとよんでいる。これになると、もう焼畑には使えない。作物をつくつても、少ししかできない。ススキが繁茂しだすと、そのままづいていく。どこもススキの群落におおわれ、焼畑にする土地がだいたいすくなくなっていくという。

ススキの群落がおおくなつたら、どうしようもない。ススキ群落を焼くと、山火事になりやすい。灌木の小ヤブのときヤマ焼きをする。小ヤブのことをチーエン、大ヤブつまり林のことをバジヨウとよんでいる。ヤマ焼きのときは、五メートルくらいの防火線をつくる。これまで山火事にいたつたことはない。急斜面のヤマを焼くときは、斜面の上から火をいれ、途中から下から焼く。比較的平坦な土地では、下側から火をいれる、という。急斜面のヤマでは、上から火をいれていくのが焼畑民の常識である。火勢を小さく保ちながら、ヤマを焼いていくことができるからだ。逆に下から焼くと、火は大きくなりすぎ、山火事になってしまう。

ヤマ伐りは大きい木は男が、小さい木は女がする。ヤマ焼きは男だけである。特別な儀式はしないが、神さんに、豊作を祈る。種まき、除草、収穫、脱穀は、みんなである。除草は、二、三回。収穫時になると、鳥やネズミがくるけど、そのままにしておく。四かご分(約一斗)種モチをまくと、一〇〇〜一五〇かこの収穫。播種量の二五〜二八倍が収穫量となる。木が大きいヤブは、作物の出来がよいが、逆に木が小さいと出来が悪い。

焼畑にする土地の選択は、ジョーロ(郷)の役所の許可をえるが、とくにそのための費用はいらない。ヤマ焼きに許可がいることは、さきの村でもきいた。森林保護区は禁止、ヤブ、すなわち休閑林のみ許される、という。隣村との境界は、川をはさむ。

家の構成は、夫婦、夫の母、六人の子、夫の妹の計一〇人。現金収入としては、バナナ、パイナップル、ピー

→1970年前後、高知県の山麓には、焼畑の調査には、火入りに注意する。火入りの月形から、焼畑の形状がわかる。焼畑の形状は、火入りの月形から、焼畑の形状がわかる。焼畑の形状は、火入りの月形から、焼畑の形状がわかる。



ナツを売れる程度。この村に一九八六年に移住してきたときには、すでに森がなかつた。一九七三年ごろ、国内難民が一万人以上きて、焼畑をつくり、木がなくなつた。当時の内乱で、じつさいかなりの数の難民がこの地域に集まつてきたようである。ということは、い

まこの周辺でみるススキの群落は、その当時の過密な人口によつて、休閑を短縮した、「本来の焼畑」とかけはなれた耕作が原因でもたらされたことになる。この地域のススキ群落は、焼畑というより戦争がもたらした悲劇の産物と結論づけていいのではないだろうか。

最後に村長さんに将来の要望をたずねた。すると、水田が欲しい、スイギエウやウシを飼つて現金化したい、焼畑には疲れた、という答えがかえつてきた。

わたしたちは、この「二四番村」をあとにして、つぎにモンの人たちが住んでいる難民キャンプをたずねた。かれらは、長いあいだのラオスの内乱のため、隣りのタイにのがれていた人たちが、最近になつてラオス国内が平穏になつて帰国したもの、帰るべき故郷を失つた人たちである、と安井さんはいう。キャンプは、三カ月前の一九九二年二月に国連の援助で建てられたものである。およそ一〇〇人のモンが、ひとつの草ぶきのロング・ハウスに住んでいる。なかには、それとは独立した自分の家をたてて住んでいる人もいた。血縁でもないおおくの人たちが、プライバシーも保つことのできない平屋の大家屋に住んでいるのだから、その精神的ストレスははかりしれないものがある。

安井さんは、五年あまりにわたり、タイ側の難民キャンプでNGOの援助活動の一環として、この人たちとすごした経験がある。彼女のおもな仕事は、子どもたちに紙芝居をみせたりして「教育」をおこなうことであつた。その教育というのは、モンの民話などの口頭伝承を老人から収集し、子どもたちに継承していくことであつた。彼女は、この期間に七〇〇種類ほどの民話を収集し、それぞれの題材にもとづいて、子どもたちと刺繍作品をつくつたりもした。そのひとつの民話をもとに出版したのが、さきにあげた童話である。刺繍をしたモンの子どもと共著になつている。その子どもたちも、もう若者や娘になり、何人かはこのキャンプにいる。

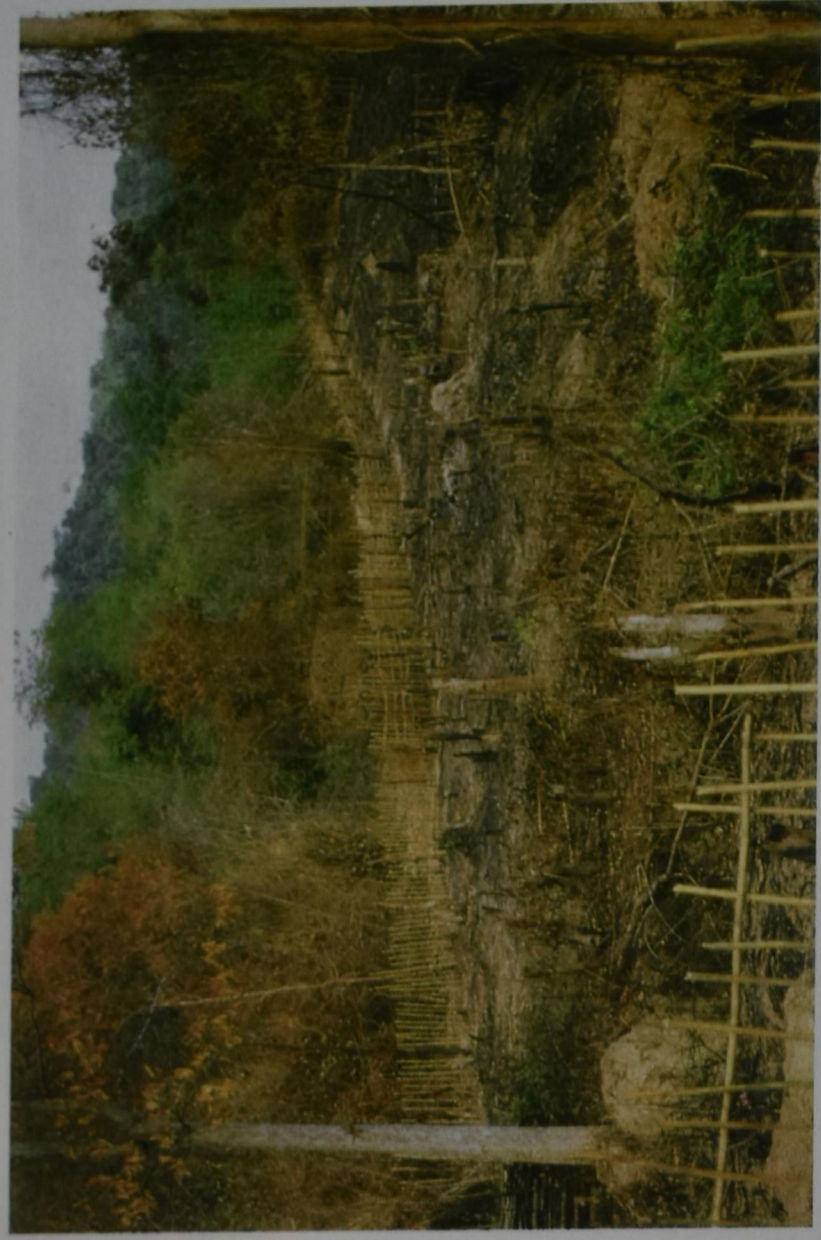
このキャンプの人たちは、国連の援助で一年間コメを配給してもらい、その過程で自立の道をみいだそうとしている。周囲の山やまにも、焼畑の作業をはじめられようとしていた。

モンの人々と青春をともにした彼女は、難民としてアメリカにわたつた三〇万にもほるモンの、とくに親しい人々を昨年八月たずねている。たまたま彼女の関心をもとに飛びこんだ世界が、モンの難民キャンプであつた。二〇代のおおくをかれらとともにすごした彼女の原風景は、どのようにつちかわれただろうか。病気の老婆や彼女の再会した友人をわたしたちの車にのせ、首都ビエンチャンにむかつた。

### はげ山を空と陸とからみる

翌四月四日、わたしたちは定期便のセスナでシエンクワン県にむかう。昨日まで旅をともにした安井さんとわかれ、あらたに林業局の若手のラオス人と大便秘の大豆田さんがくわつた。乗客は、わたしたち五人のみ。

昨日まで車ではしつた地域を上空からみる。ナムダム・ダム周辺は、そうとうひろい範囲でススキ群落である。ま



火入れ直後の焼畑。隣接する林から判断したと見られる。長期の休閑期間をへた典型的な焼畑のようだった。ビエンチャン北部

いに見える。不思議なことに、尾根を境に一方の斜面ははげ山がひろがり、他方の斜面には林が残っている。火をいれたとき、燃えひろがる境は尾根である。谷間の雑草状の水田が、そうした山やまにいくいこんでいる。目的地のシエンクワン県の中心地フオンサバンにちかづくくと、はげ山があはた状になっている。爆撃された跡だ。どうして無人状態の山やまにこれだけ、爆弾の跡が残っているのか。数年前までの内乱のすさまじさを教えてくれる。

ビエンチャンをたつてから四〇分後の午後四時四〇分、わたしたちはフオンサバンに着いた。町の周辺のはげ山は、きれいな牧場になって、ウシの群れが草をはんでいた。わたしたちは、迎えにきてくれた車で、丘の上のホテルに。六つくらいログハウス状のコテージの中央に受付と食堂がある。眼下に町をみはらすことができ、まるでお城にいるような雰囲気である。シャワーのあと、ラオス料理。

翌朝六時に目が覚める。涼しい朝だ。九時に林業局に挨拶。なまたま日本からきている海外青年協力隊の長倉さんにあう。食用作物専門で、ムギ栽培の技術指導をしている、という。現地のスタッフからシエンクワンの概況をきく。人口一九万人、その四〇パーセントがモンとカムの民族。およそ九〇〇〇ヘクタールが焼畑、という。

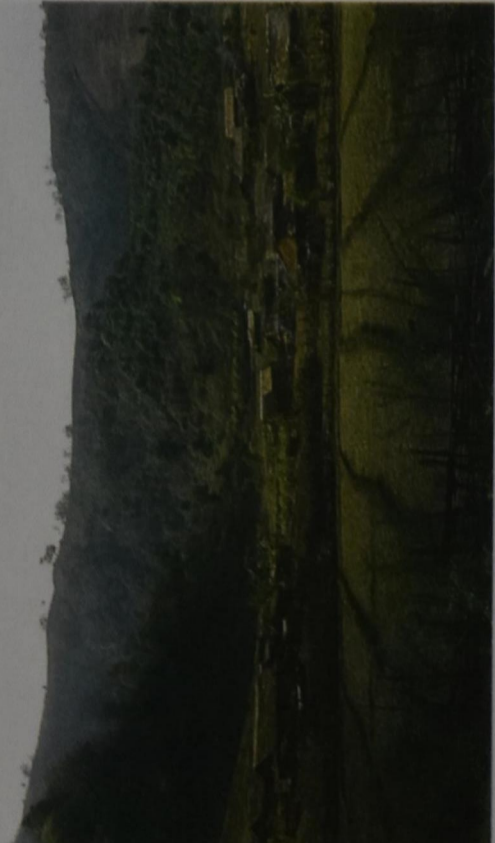
なにより現地の焼畑をみることに。早歩き東にむけて出発。牧場をすぎると、ゆたかな灌木林がつづく。ススキ群落はみられない。



上)あはた状の爆撃の跡が、いまも残る。数年前までの内戦の惨状を覚えてくれる  
下)尾根の一方の斜面にははげ山に、他方は森が残る。火入れの際、炎が尾根を境にわかれたのであろう

係はノンベがおおく、かれの妻もノンベからきている。かれの家族は、夫婦、四人の子、夫の父母、夫の弟の九人である。一ヘクタールの土地をひらいた。土地のほかり方は、一メートルの杖ではかる。納税のため、畑に種をまくと、村長と役員がこまかく畑の面積をはかる。税は、ヘクタールあたり二〇キログラムのコメで、村長があつめる。参考のため、村長さんの隣りにいた人にならぬと、一五人家族で一・五ヘクタールの畑をもっている、という。各家族で土地をえらんで伐採し、個別に焼く。一〇戸がまとまって管理している焼畑が、四・五ヘクタールある。

この地域の土地は共有。水源にちかい森や遺跡沿いの一キロメートルの幅は伐らないようにする。イネやトウモロコシを栽培するのは、小石のおおところがい。やせた土地は六年、肥沃な土地は三年休ませる。休閑中



モン民族の住む「カエルの池」の風景に水田と山をのぞむ。山がちな周囲を示す典型的な風景である

の植生の遷移は、イネ科の草本の種類でこまかく認識されている。ジャイ、ガエ、パダとプチ、タウ、ドンジャイの順にうつっていく。三〜五年後、灌木がでてくる。小ヤブは、チエンという。若い林はジョングモとい、現在はこの状態を伐採して、ふたたび焼畑にしているが、さらに休閑年数をおおくと、ジョングラロとよばれる本来の焼畑にもっとも適した林になる。原生林のことは、ハヨントウオという。

林の再生をはやめるため、一般に日本や中国南部では、ところによってハンノキ類を移植し、休閑期間を短くし、林の再生をうながしたりするが、ここではそういう目的でとくに木を植えたりはしないそうである。

伐採は、家族ごとに土地を選んでおこなう。とくにひとつにまとまることはない。

火入れのことはラオテとい、三月上旬から四月上旬におこなう。焼く土地の周囲、とくに上斜面には、一メートルほどの火道をつくっておく。畑にする土地の上斜面に林がある場合は上から火をいれるが、林がなければ下から焼く。いままで山火事になったことはない。

焼畑のことは一般にラ、常畑のことはラベ、菜園のことはワテとよんでいる。火入れ後の畑はとくにチャウテとい、休閑のことはコウテとよび、先のモンとことなる。

五月にイネをまく。種をちいさな穴を浅くはつてはうめていく方法である。イネの品種ごとにことなつた畑で栽培する。モミつきのコメのことは一般にブレイとよんで、精米したコメはスーとよんでいる。モロコシはコンジヨウとよんでいるが、甘い葉を食用とするコンジヨウには、パ(白)、リヤ(赤)、ドウ(黒)の品種がある。儀礼のためには、白い品種のコンジヨウ・パを使う。

イネの品種は、おおい。モチ性で八品種、ウルチ性で五品種ある。モチ性のイネのことを一般にブレイ・プラウオとよんでいるが、その名でよばれている特別の品種もある。そのほかの品種として、大粒のブレイ・ンダ、

ところどころに焼畑が散在する。しかし、けわしい斜面では、一部に土砂の流出した岩盤が露出している。道路から少しはずれた集落にならざる。

この村は、バカとい、四〇戸からできている。村のことをモン語でシヨメとい、四つの村があつまって、ひとつの郷、ジョーロを形成している。ジョーロ全体で一四〇戸、ブオコツとよんでいる。その意味は、「カエルの池」という。このあたりの住民は、モン民族だけ。四〇すぎの村長さんから話を聞く。

### 「カエルの池」の焼畑・常畑・休閑

この地域は、七〇年前にひらけた。最初の人たちは、ベトナム国境にちかいノンベからきた。当時は、落葉広葉樹林がひろがり、大きな木があつた。村長の生まれもノンベ、父はベトナムのゲーセンという地でもまれ、祖父はそこで死んだ。六年前に、ここらうつてきた。政府が水田をつくるというのてきたが、水田らしいものはできなかった。このシヨメには、一〇戸の親戚がある。たとえ親戚をつらうてうつてこようとも、役所の書類がいる。通婚関

ブレイ・カテン、まるいブレイ・ト、黒土にむいているノゲ(芭)のあるブレイ・ア、モミに黒い筋のあるブレイ・チョー、なかのコメの色が黒いブレイ・チャ、長い粒のブレイ・ガがある。ウルチ性には、ブレイ・チャイ、ノゲのおおいブレイ・プラウ、ブレイ・チョンク、ブレイ・ダ、ブレイ・ツアイといった品種がある。この村でよく栽培するイネは、モチ性ではブレイ・ト、ウルチ性ではブレイ・ツアイとよばれる品種だ。

輪作のことをワテとよんでいる。たとえばウルチ性のイネでは、最初の年にブレイ・ツアイをつくり、収穫がすくなくとも、二年目にはブレイ・プラウにかえる。三年目にはブレイ・ダをつくる。

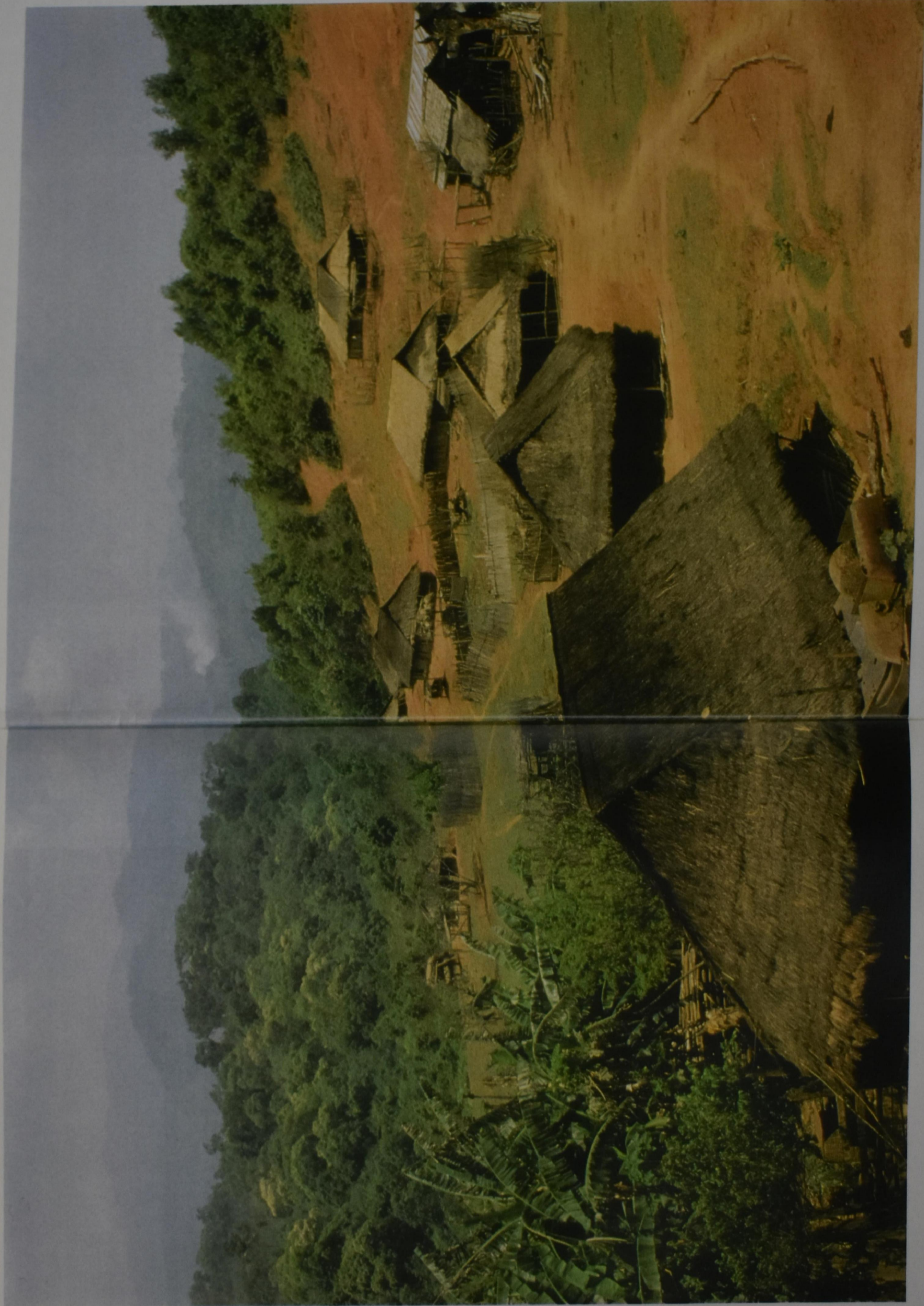
そのほか、トウモロコシ、カボチャ、インゲンをつくっている。トウモロコシにも、ウルチ性とモチ性がある。自分の焼畑は今年で三年目になるが、三年間ともイネだけをつくっている。水田はひろげたくても、水がない。ウシは牧草が問題だ。

将来への希望としては、マンゴ、オレンジ、コーヒーなどを植えたい。すでに一ヘクタールのコーヒーを栽培しているが、この地域ではよくできない。子どもたちへの願いは、じゅうぶんな教育を受けさせて、なん人がこの村に残つてイネのかわりに果樹などを栽培してくれなら、と思つている。

一時間ほど、聞き取りをした。五、六匹のイヌが、炉端に寝ころんでいたが、どうしてあんなにたくさんイヌを飼っていたのかたずねる機会を逸してしまった。食料用かもしれないと、あとでベトナムにおけるイヌの食習があるのをしつて思つたりしたが、なぜかあのイヌたちの光景が、いまでも鮮明に思いだされる。

この日の宿泊地のバン・ナム・ホンという温泉場は、原生林のなかにひっそりとあつた。夕方に野生のニワトリ料理がでるといので、そのニワトリをみてみたいと思つてみたが、もうミンチになっている、という。結

フォンサバンの南、約40キロメートルのナホ  
一村では、土地を風葬させないよう適切な焼  
畑を施している。そのため、周囲の  
まわりの森林はきれいにたもたれている。遠  
くに見える煙は火入れをしているのだらう



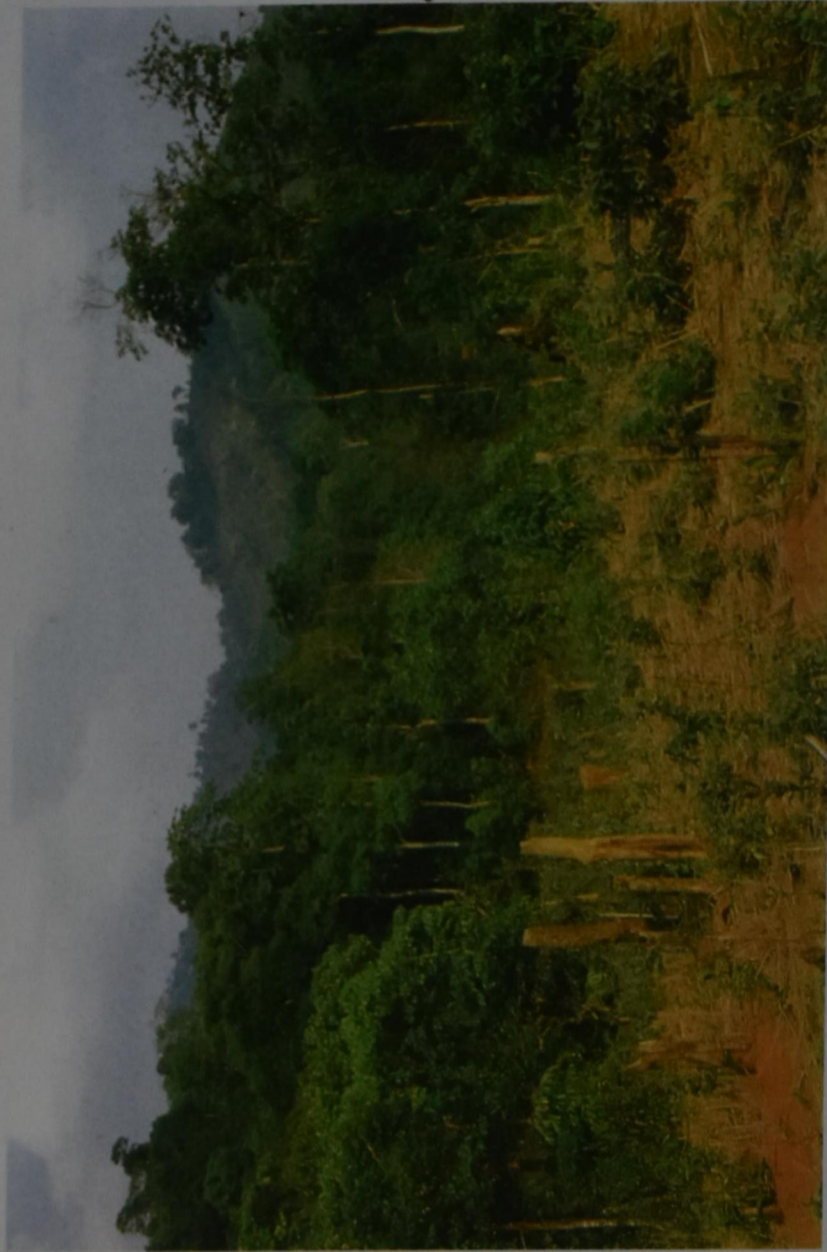
風 夕食のメニューは、なんの肉のミンチかわからない  
も、カエルの姿焼き、ナス、タケノコと野草という  
自然食品であった。

### 「本来の焼畑」の村を求めて

翌日はベトナム国境ちかくの開発プロジェクトを視察す  
る予定であったが、計画変更の願いをだした。それは、

じゅうぶんな休閑期間をもった本来の焼畑の村をみたい、  
というものであった。「本来の焼畑」というのは、ゆたか  
な森林を基盤に成り立っているものである。焼畑の持続  
性は、自然が回復していくだけの休閑期間を前提にしな  
ければ保つことができない。そして、この前提が守られ  
てきたからこそ、焼畑という農法がえいえいと受けつが  
れてきたのである。フォンサバンの南にはまたかなりの

森林が残っている、という。この地域なら、きっと自然  
のリズムをいかした焼畑をみることができるにちがいな  
い。わたしたちは、一度フォンサバンにかえり、翌四月  
六日確かな情報をえるために、カイン郡庁のあるシーボ  
ンをおとすることにした。フォンサバンから南へ三三  
キロメートル、車で一時間半の道のりである。昼すぎに  
郡庁をたずねる。

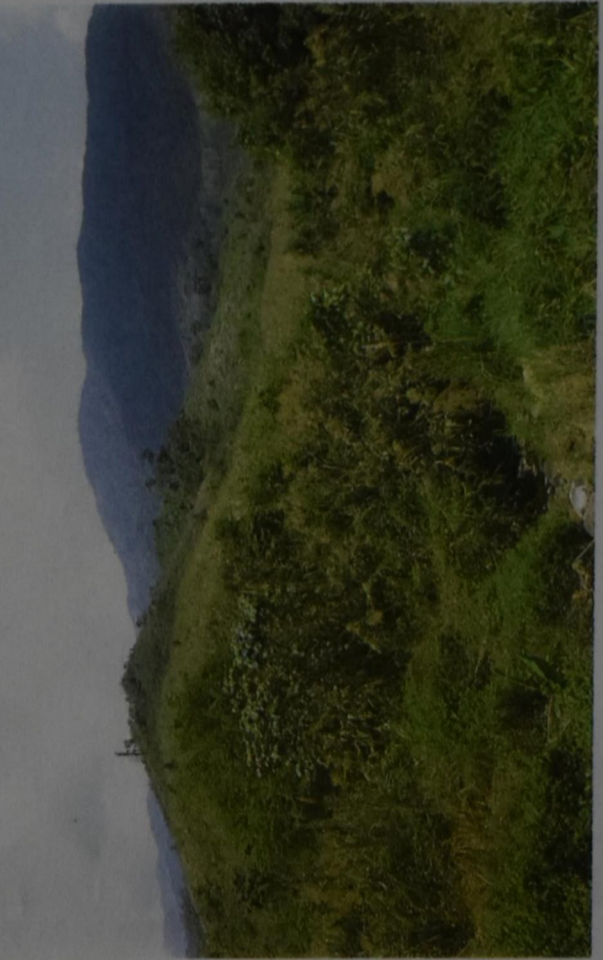


→焼畑を放棄した直後の休耕地。小ヤブが芽ばえ、後に休耕地にみえる林の典型的なパターン。

↑部族地に群生するススキが、灌漑水に移行するところ。難民キャンプ付近

郡全体の人口は、二万三〇〇〇人。民族的には、モンが五〇パーセント、ついでラオ、カムがおおくをしめて

いる、という。ここには、焼畑にかぎってもかなりこまかい資料があった。以下は、一九九三年につくられた資料からのものである。



ト

ひとりえらんで、役所のスタッフといっしょになって、森林の保護にあたっている。

—役所から村びとへの指針は。

答 土地を分配したりする。一戸あたり二カ所、五人の労働力で一・五ヘクタール。少人数では一戸当たり一ヘクタール。

—この地域の焼畑で栽培している作物は。

答 イモ、トウモロコシ、ケンがおおい。ついでダイズ、キャッサバ、タロイモ、ヤマイモだ。モンでは、ケシのかわりにシヤガイモを栽培している。ケン栽培を禁止して、アヘンの常飲者を減少させるため、地元の医者を通じて全体で二・五万キップの薬をあたえている。

—伝統的な焼畑をみるには、どこがよいか。

答 ナホー村はどうか。戸数は一〇七戸。そのうち四戸は水田に従事しているが、他は焼畑に依存している。南のサンキン村（戸数は一〇四戸）では、一ヘクタールの木を伐りひらいた場合、地元産のカシ類の樹種の苗を六〇〇〇本植えなければならないと規制をもうけたので、もともと村びとがでていくケースがふえている。そのかわり、外からあたらしく移住者がはいつてきて、いろいろ問題がおこっている、という。

結局 わたしたちは、ナホー村をつぎの訪問地にえらんだ。郡長は、その日のうちにわたしたちがおとずれることを村びとにつたえ、協力するように伝令をおくるという。最後に、この郡ではたらいっているスタッフの構成を説明してくれた。総計二八〇人。農林業関係者が五人、教育関係者が一八一人、医療・保健関係者が五人で、その他残りを事務関係者がしめる。

いったんフオンサバンにふたたびもつて、翌朝ナホー村をたずねることになった。ナホー村には、さきの郡庁のあるシーボンから、林道のような六キロメートルの山道を車で二〇分、九時半目的地についた地図上で予想していたように、かなりの森林が残っている。

## ナホー村民七〇人との対話

わたしたちは、郡庁から紹介された村長さんの家をたずねる。小高い丘の上にあるすいぶん大きな家だ。四五歳くらいのインテリらしい村長さんは、さつそくわたしたちを集会所に案内してくれた。すると、三〇平方メートルくらいの部屋にいつぱい村びとがあつまっていた。あつて数えてみると、七〇人にもたついていた。男ばかりだ。なんんかの子どもたちが外からのぞいている。

まず、村長さんの挨拶からはしめる。

ほとんどの村びとは、自然資源に依存している。わたしたちは、焼畑にかわるものをもっていない。政府は、つぎのあたらしい生業の導入をはかる処置をとつてほしい。

村びとにとって、直面している問題は土地である。土地がたいへんかぎられている。村の戸数は、一一〇戸で、人口約八〇〇人。三五ヘクタールの水田に、五〇ヘクタールの焼畑耕地面積しかない。原生林のような森があるが、これを保護していくためには、おおくの土地が必要になる。あと一〇〇〜二〇〇ヘクタールが必要だ。

—隣村との境界を、どのようにきめているか。

答 郡庁できめる。近隣の村びととのあいだには、土地問題でいざこざはない。

—この村は、焼畑をいとなみながら、どうしてこれほ



ナホー村の村長夫妻と子ども。10年ほど前に、ナホー村にうつってきた

ナホー、さらに一〇キロメートル南にいったサンキンの三つである。これらの村は、いずれも森林保護を重視しつつ、本来の焼畑をいとなんできたが、近年他地域からの移住者が、これを無視しつつあり、大きな問題になっている、という。移住者たちは、森林を伐りひらいてしまったあとで役所に連絡してくるから、規制もあつたものではない、という。こうした移住者には、村に親戚をもつものもあつたのよそ者がいる。以前から住む村びととの争いが一九九三年からたくさん生ずるようになった。また、下流の水田稲作民が灌漑の水不足に悩まされ、上流の焼畑民のやり方を訴えるようになった。現在、焼畑を縮小するような政策がとられつつあるし、今後が不変である。とにかく現在では、他地域からの移住者は認めないようにしている。つぎは、郡長にきいた税金の話にうつる。

山を対象にした税金（A）には、以下のように三種類がある。

- 一 森林を伐りひらいた場合、一ヘクタールあたり三〇〇〇キップ（二〇〇キップ≒約一四円相当）
- 二 休耕地のヤブを伐りひらいた場合、二五〇〇キップ
- 三 牧草地にした場合、二〇〇〇キップ

いっぽう、水田を対象にした税金（B）は、つぎのようである。

- 一 ヘクタールあたり四トン以上の収穫量では、ヘクタールあたり四〇〇〇キップ
- 二 ヘクタールあたり四トン以下の収穫量では、ヘクタールあたり三〇〇〇キップ

—A-1とA-2は、だれがどのように区別しているか。

答 村民からひとりえらばせ、役所のスタッフといっしょに実地を調べる。

—村の土地は、どのように管理されているか。

答 基本的には、村びとがおこなう。村びとのなかから

どの森林を残しているのか。

答 この村では、土地のよいところで七〜八年間作物を栽培する「長期焼畑」と比較的土のやせているところで二〜三年作物を栽培する「短期焼畑」をうまく使われている。

ついで、村内の組長さんの一人がたちあがった。特定の地域では焼畑をくりかえし、特定の地域で森を保護している。焼畑にかわるよい方法があれば、教えてほしい。

べつなひとが発言する。この村では、これ以上水田を拡大することはできない。焼畑は森林に依存しているが、自然に依存している以上、不安定である。焼畑以上に生産性のある方法を模索中だ。

三番目の発言者は、生産性をあげるためには、ウシや換金作物が必要だが、村びとの力ではかぎりがあるので、外からの援助が必要だ、と訴える。

一人の長老がたちあがった。三〇年前にきたときから水田を拡大しようとしてこみてきたが、適した土地がかぎられている。焼畑から畜産にかえようとしたことがあるが、ウシが病気になる。また、換金作物を導入しても、病気になる。われわれのかぎられた知識では、改良にも限界がある。教育が必要だ。また、飲み水をよくし、保健衛生の改善をするために、井戸をはる必要がある。

郡庁からきた農林業関係のスタッフが發言する。ウシと換金作物を普及させるためには、マーケットの問題がある。木の苗やトウガラシを普及させることもこころみている。

わたしは、ミッション側を代表して最初に挨拶をおこなったほか、村びとからの質問にもできるだけ答えるようにした。わたしの發言は記録していないのでこまかい点はほとんど失念してしまったが、おもな要点はつぎのようであつた、と思う。土地はどどこもかぎられている。土地の生産性をあげるためには、この土地のことを熟知している村びとの知識をいかしていくことがなにより大



人口増加と森林保護をめぐって、村びととナホーの集會

自由にとつてよい。建築材にんしては、村はふたつに意見がわかれている。森林保護派は、自分の家のためという限定で、必要量を自由で伐つてよい、と主張している。ところが非森林保護派の意見は、五〇センチ以上の木なら一本八〇〇キップで売つたらよい、というものである。

保全林は、村長と委員会の管轄下にある。届出なしに盗伐をした場合は、罰金の四〇パーセントを盗伐の発見者に、残り六〇パーセントを村に支払う。最近こうした事件がおこつたが、せいぜい年に一、二回程度だ。

村全体に属している保全林は五〇ヘクタール、それとまったく伐つてはならない保護林が五〇ヘクタールある。生産林が六〇ヘクタール、焼畑耕地が一〇ヘクタール、その他が焼畑の休閑林になる。六〇戸が焼畑に、四〇戸が水田に従事している。さきに郡庁で書いた数字とくらべていくと、いかにわがっている。

### 体系だった焼畑農耕の事例

この村には、ふたつの大きな休閑地がある。この村は三つの組にわかれていて、ことなる組のものがひとつの休閑地のなかで隣りあわせになっていることもある。休閑地は個人の所有だ。所有地の境界のつけ方は、林の立木に印をつけておく。一九七五年以来約三〇戸の家で休閑地をわけていたが、現在五〇戸の家でわけている。

火入れは、土地の近接するものがいつしよになつておこなう。まわりから火をいれていく。

焼畑で栽培する主要作物は、イネ、トウモロコシ、キヤツサバ、ヤムイモだ。モン語でマングドレイとよんでいるジズダマも、重要な常食作物となっている。こうした常食作物のことは、カイとよんでモチ性をカイ・ダウ、ウルチ性をカイ・ドウとよんでいる。その他の作物にダイズ、カボチャ、キュウリがある。

三年間栽培して放棄する焼畑のことを、「もとの地にも

切だ。外に頼りすぎると、なにかあつたとき自分たちの生計の基盤を失つてしまう。焼畑は、周知のように森を再生し、森を大事にしていくからこそ、末ながくいとなんでいくことができる。焼畑の生産性を高めていこうとするなら、栽培したあとと休ませている土地をいかにすることが大切である。たとえば、自然の回復をまつだけではなく、有用樹を植えたりして、積極的にはたらきかけていくことだ。

村びとの集會は、一時間半ほどつづいて暮をとした。昼食後、わたしは村長さんからこの村の歴史や焼畑についてさらに具体的な話をきいていくことにした。

### 人口増加と森林保護

村長さんの名前は、サエン・チャンという。村長というのは、郡庁が村びとのなかから三名を指名し、そのなかから村びとの選挙でえらぶ。かれが村長になつてから、三年一カ月になる。かれは、一九八五年にこの村に移住してきた。うつてきたころは、シーボンにある郡庁ではたっていた。当時この周辺は、焼畑地帯だった。かれの父は、モン郡でうまれたが、一九六九年爆弾で死んだ。父の父は、ベトナム国境ちかいノンベでうまれている。

最初にこの村に住んだのは、中国の少数民族だ。いまから八〇〜九〇年前のことになる。ホとよばれる民族が、その代表だ。

モンの人たちが、山にすみ、低地におりないのは、カエルがなくと死ぬと信じているからだ。モンが最初にこの村にやつてきたのは、一九五四年のことだ。水田と焼畑をいとなんでいた。モンがふるるにしたがい、ホはほかの地域へうつつていった。はいつてきたモンは、黒モンと白モンだ。この村から二時間半ほど南にいったコボという村からやつてきた。さつきもいつたように、モンが長いあいだ低地におりなかつたのは、カエルのためだ。それまでは、ずっと山岳地帯にすんでいた。

どる」という意味のウワロとよんでいる。一年目の畑のことをテーチア、二年目と三年目の畑をテローとよんでいる。テーチアには、二種類の栽培の仕方がある。

A 三年間トウモロコシ、カボチャ、ダイズを栽培する。除草は年一回のみ。トウモロコシの茎を残して、つぎの火入れに使う。

B まぎキユウリ、ヒョウタンを植えて発芽してから、雑草を除草し、イネの種もみをまく。除草は、あわせて年一回おこなう。イネウラは、翌年の火入れて焼く。二年、三年目もおなじだが、出来が悪くなると、トウモロコシにかえる。トウモロコシは、あまり養分を吸わないし、雑草と競争することができる。

A型とB型のように栽培の仕方をわけるのは、土壌による。A型の土壌は、アーテポクとよんで、灰色から黒っぽく、水分がおおい。いつぱう、B型の土壌は、アーテレイとよんで、ミズがおおい。B型の土壌がイネを栽培したのち、A型にかわることがある。そのときは、イネをやめてトウモロコシを栽培する。しかし、A型の土壌がB型にかわるのはなかなかむずかしい。

栽培したあと、畑を放棄し休閑するのは、つぎのふたつの理由による。ひとつには、植生の回復が土地を肥沃にすることである。ふたつ目の理由は、休閑中の灌木や樹木が雑草の繁茂をおさえてくれることである。

休閑の一年目には、モン語でバドワやパイアアといったイネ科の草本がはえてくるが、二年目には、ドンジエンやドンヒーといったカシ類がはえてくる。ドンマモという木も、よくはえる。三年目になると、ウルシ科のマイベントか、ドンテンという木がはえてくる。

さきに「長期間焼畑」とよんだ畑は、ダイター・クいとよんでいる。これは、いまのべた焼畑で、三年目がおわつても生産が安定しているのなら、さらに耕作をつづける。条件のよいところは、スキで耕起する。このタイプの畑では、イネのみ栽培する。土砂の流出で土地が荒

いまの村びとのおおくは、一年前に移住してきた人だ。それ以前村は五〇戸ほどとなつていて、二年前から六〇戸も移住してきてふえた。そのおおくは、パーサイ郡のノム村や、タト村やサルウン村からやつてきた。すべて親戚をつうじてであるが、そのおもな要因は、治安の問題だ。かれらの母村では、反政府の動きがあり、村びとは、治安の乱れからのがれてきたかれらを受けいれざるをえなかつた。

そのため、村びとは焼畑にもなるあたらしい規則をつくつた。まず一家族がもてる焼畑耕地面積は、七人以上の家族では一ヘクタールをこえてもよいが、五人家族では〇・七〇〜〇・八ヘクタールにとどめる。畑の面積は、まくイネの種もみの量でさめる。五〇キログラムの種子量が、一ヘクタールとおなじとみなす。収穫は、ヘクタールあたりおおよそ一・五〜一・六トンになる。播種量にたいする収穫量は、約三〇倍になる。イジコウイツチが調査したラオス北西部のラメットウ社会の焼畑の収穫量は、一一〇〇〜一六七〇キログラムだから、この村の収穫高とさほどかわりがない。

原生林や原生林にちかい森は、伐りひらいたりしない。村には、焼畑にかんしてこまかに規則がある。そうした規則は、村全体の会合でさめる。周囲の山は、保全林、保護林と生産林にわけられる。保全林や保護林には、原生林や水源地がふくまれる。保全林を伐りひらけば一本あたり五〇〇キップをはらわなければならない。火事をおこせば、被害にあつた木の数を勘定して、一本あたり五〇〇キップをはらわなければならない。

家をたてる目的などで木が必要な場合には、許可をあたえて生産林で確保する。また外部の者が燃料材のために伐る場合には、それを運ぶトラックの大きさと、支払う額がきまつている。小トラックの場合は二〇〇〇キップ、中トラックの場合は三五〇〇キップ、大トラックの場合は三〇〇〇キップとなる。村びとは、枯れ木などは

れないように、ゆるやかな斜面だけを対象にする。肥料はまったく使用しない。

ナホーの焼畑は、まるで焼畑農耕の模範のような事例であつた。ただし、いくつもの事例を直接調査すれば、村長さんの話したことは矛盾することがでてくるかもしれない。こうした短時間の概括的なさきこみでは、かれらの理念采の情報収集にとどまつてしまうことがすくなくない。さききのべたような村のきびしい規制のもとでは、村びと同士の間にはかなりつよにちがいない。

長期間住みこんで調査すれば、今日のラオスのみならず東南アジアの各地でみられる不安定な政治情勢のなかの集団編成や地域におけるあらたな適応の仕方を浮き彫りにすることができるだろう。そこからさらに、危機状況における人間の生存にかける「したたかな戦略」をよみとることができるともかもしれない。

いつかふたたびこの地をおとすれることを願いながら、ベトナムにむかつた。

### 参考文献

Lehoucq, R. *Lamet-Hill Peasants in French Indochina*. Göteborg, 1951 (この本は、一九七九年ニューヨークのAMS Pressから復刊された)

### 注

- (1) 焼畑「焼畑農耕の普遍性と進化」日本民俗文化体系5、小学館、一九八二年、焼畑「自然の水鏡性：焼畑と牧畜における遷移と野火の文化化」『薩州地誌に生きたる。薩州の社会』雄山閣出版、一九九四年をよ
- (2) 野火「野火のインドシナ半島への大きな役割」『国際開発ジャーナル』一九九一年三月号、国際開発ジャーナル社
- (3) 本誌五八号に安井氏による「針と斧をもつたたりべーモン族の針仕事」が掲載されている。
- (4) ラオスの住民は、おもにタイ系とミナオ・ヤオ系の民族である。タイ系には、黒タイや白タイをはじめ、全人口の約六割をしめるラオ民族がいる。ミナオ・ヤオ系には、メオともよばれるモン民族がいる。カムは、普遍的にはオーストロアジア系のカム語系の民族である。
- (5) H. Hoang (前掲書二八八ページ)

付記：なお、この焼畑調査旅行では、現在アジア経済研究所の研究員である鈴木忠徳さんと共働りついで、たいへんお世話になつた。また、本調査は、国際協力事業団の林業水産開発協力部の計画課の企画のもとにおこなわれたものである。現地との連絡、調整をよくめ、なにかとご配慮いただいた。また、現地でお世話になつた関係者の方々に、感謝の意を表したい。